環境防災モンゴル国スタディーツアー
（2025 年度「日本青年友好植樹団モンゴル派遣」）
帰国報告

タイトル：モンゴルの地で得た贅沢な試金石

氏名：根本蒼唯

１．はじめに

私は所属する 311 ゼミでこれまで、東北各地の被災地や震災遺構に出向く活動や、宮城県内の小学校、兵庫県南あわじ市の小学校で防災授業を行ってきた。そして今年度からは、地震や災害の要因的な側面に目を向けて、さらに知識を深めて正しい情報をより論理的に話すことができる力を身に着けたいと感じていた。

そんな中で、311 ゼミの古市先生から今回のモンゴルスタディーツアーのお話をいただき、環境問題や、防災の実情について知るこれ以上ない機会への高揚感が高まりぜひ参加したいと強く感じた。

参加出来ることが決まった際には、強い覚悟と責任感を感じた。宮教の中で代表として選ばれたという責任はもちろん、国の大学生を代表してモンゴルで植樹を行うという点においても、たくさん学びを得なくてはならないなと気が引き締まる思いになった。

２．訪問先で見たこと感じたこと

9 月 28 日、成田空港よりモンゴル国内最大のチンギス・ハーン国際空港に出発した。飛行機の到着が近づくにつれ、窓からモンゴルの草原や建物が見えてきた。私自身初の異国の地のため、武者震いがした。モンゴルに降り立つと、肌寒さと空気の違いを感じた。首都ウランバートルは標高 1,300ｍの位置にあるため、日本と比べると少し空気が薄い感じがした。さらに乾燥を強く感じたが、訪蒙した 1 週間は想像していたよりはかなり過ごしやすい気候であった。

写真1. 在モンゴル日本大使館

翌日は、在モンゴル日本大使館に訪問した。大使館の方々に、モンゴルの紹介や、気候について大変興味深い深いお話をたくさんいただいた。外交官の方と関わる機会は初めてだったのだが、様々な国を飛び回りながら日本のために懸命に働いている姿はとても格好よく、尊敬できる仕事だと感じた。

写真2. 自然環境・気候変動省

写真3. バイカルエヘ高校

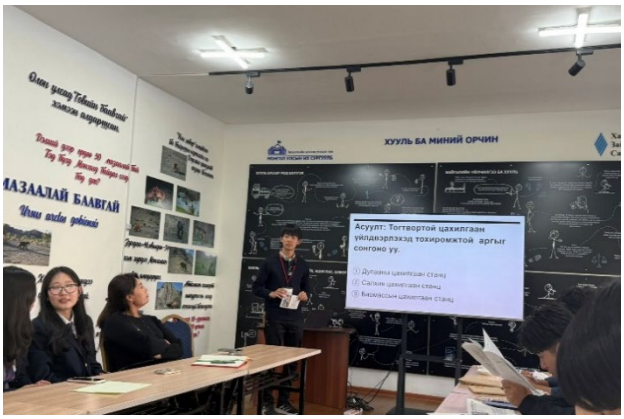

写真4. バイカルエヘ高校での発表の様子

次に自然環境・気候変動省へ伺った。ここはモンゴル国内での自然環境や気候変動の問題にさまざまな分野から研究をしている機関であった。地質成分や、永久凍土、植生や砂漠などさまざまな研究室に入りお話を伺うことができた。それぞれが専門分野を持っている研究者の話はより具現性があり、彼らの思いや考えをしっかり自らのものにして取り入れることができた。

次にバイカルエヘ高校を訪問した。まずは、現地の高校生から日本に対して様々な質問を受けた。その際、文化の違いを改めて大きく感じた。モンゴル国内は渋滞がひどく、交通の便が非常に悪い。そのため朝の 3 時に起床して通学している学生や、ピアスや派手なメイクなど日本との違いを大きく感じた。また、吉川先生（岡山大）が現地の学生に向けて「あなた方は将来、遊牧民になりたいですか？また、なれると思いますか？」と質問していたのが大変印象に残っている。20 名ほどいた学生のうち、3,4 名が手を挙げ、遊牧文化からの別離を感じたと同時に、未だに志す学生がいることに驚きと感動を覚えた。

翌日は、ウランバートル中心部から 40 分ほど車に乗った先にある、日本人死亡者の慰霊碑に参拝した。モンゴルに日本人の抑留者がいたこと自体、あまりイメージがなかったため、大変印象に残った。次に向かった資料館「さくら」では、日本人抑留者の歴史や資料などをゲルの中で展示されていた。資料館を運営しているのは、現地のモンゴル人だったことが大変驚いた。彼は、日本人抑留者に対し大変興味をもっていて、自らの手で資料を集める活動や、日本に行き、実際の抑留者や遺族に話を聞く活動を行っているそうだ。彼から日本人に対する強い敬意を感じ、我々もこの事実をさらに多くの人に知ってもらう必要があるなと感じた。

夕方からは、ホスタイ国立公園に向かった。ウランバートル中心部からおおよそ 2 時間から 3 時間ほどかかったが、中心部のビル群から住宅地、平野と次々に変化する景色を見ているとあっという間の道のりであった。

ホスタイへ到着すると、先ほどまでのウランバートルの建物群や喧騒が嘘のように、美しく静かな草原に心を掴まれた。見渡す限り何もなく草原が広がるその風景は非常に感動的だった。その日の夜

写真5. ホスタイ国立公園で宿泊したゲル

は公園の管理者の方から、国立公園についての動画を見せていただいた。大変広大でさまざまな大地の姿をもつこの公園の美しさと研究における重要性が伝わった。

夜はゲルに宿泊した。モンゴルへ行ったら是非体験したいと思い、大変楽しみにしていた。中は4人分のベッドが並んでおり、中央に薪ストーブがあった。薪ストーブは温度調節が大変難しく、同部屋のメンバーで効率よく部屋を暖める方法を考えながら、良い体験をすることができた。

翌日は、ホスタイ国立公園を、少し不安なロシア製の10人乗り程度の車に乗り1日かけて回ることができた。一面草原の中、馬や羊、鹿やきつねを見ることが出来た。日本語が堪能な、現地大学の植生などに精通した先生にお話を伺いながら、植生の変遷などについて学ぶことができた。過放牧により死んだ草原と、生きている草原の違いを実際の目で確かめたことで、今までひとまとまりで草原と考えていたものにも種類や状態があることが分かった。また、鹿に芽を食べられるため白樺林が減少傾向という事実に対して、鹿を食べる狼が減っていて、狼が減っていることにはタヒを守るためという理由があり、それぞれにつながりがある事が大変面白いと改めて感じた。また、ホスタイ国立公園はこのようなつながりを知るうえで非常に重要で大きな実験装置であるとも感じた。

最終日は、第149番学校に訪問した。この学校は数年前に日本の無償資金援助で誕生したもので、先日天皇陛下も訪れた場所である。大変綺麗な学校で、盛大に歓迎をいただいた。この場所で、生徒とともに植樹を行った。植樹に参加したメンバーは、学校のエコクラブに所属している学生で、苗木を植えた際も、土をかぶせたり、石で土台を作り囲んだりと、大変手際が良く、このような活動に慣れていることが伺えた。

全ての行程を終え、翌日帰国の途についた。この7日間で、国籍も文化も異なるモンゴルの方々と関わることができたのはもちろん、出身も年齢も学ぶ分野も異なる日本の他大学の学生とも、関わる機会を得ることができたのが大変大きな財産になった。

3．感想

吉川先生（岡山大）がおっしゃった、「初めて行った国は故郷になる」という言葉が今となって強く共感できるなと感じる。自分にとって初の海外旅行だったことに加え、モンゴルという比較的なじみの薄い国だったため、始めは不安や心配が多かった。しかし、初めてがモンゴルで良かったと疑いなく思うことができるほど、モンゴルという国に文化に人に強い愛が芽生えた。

また、モンゴルという国はこのような分野を学ぶにあたって重要な環境であると強く感じた。さまざまな気候やバイオームと、手つかずの広大な大地を実際にこの目で見て学ぶことができたのは、これからの学びにおいて重要な経験で、贅沢な試金石にしていかなくてはならないと今後への活かし方に身が引き締まる思いである。

4． おわりに

このような、大きな経験をさせていただく中で、たくさんの人にお世話になり、学びをご教授いた

だいた。今後どのように生かすのかが大変重要になると考えている。現地に赴き、自分の目で見て経験して学ぶということの重要性を改めて感じたため、現地視察の回数を増やすということを今年度の目標の一つとして追加したい。これは 311 ゼミの活動に積極的に参加することはもちろん、自主的に行ける範囲の、震災遺構や、災害危険や履歴のある地層などを視察していきたい。

年度末には仙台大学の講習で防災士資格を取得する予定である。これを今年度のゴールにし、来年度からは、さらに環境防災という部分に強く目を向け、これまで以上の現地視察や、ゼミでのより具体的で詳細な学びをしていきたい。私の中には、その際に思い返せる「あ、モンゴルはこうだったな」「モンゴルでみた川の曲がり方だ」「日本の気候だとこうなるんだ」という素晴らしい比較対象の経験がある。この強みを活かし、「自分を守り、人を守れる子供」を育てることができるようになりたい。